

2020年東京オリンピック文化プログラムの基本構想に関して。

杉本博司

文化は国力であるという意識を共有すること。文化は政治経済に比肩すべき国の資産であり、スポーツも文化の一部である。その資産を、オリンピックを機会に有効に海外の人々に喧伝することが求められる。文化は国力でありアートはその戦略であると捉えたい。

近年における世界における文化状況の特質を一言で表わすと、それは「越境する文化」であると言えます。現代美術、演劇、ダンス、音楽、映像、古典芸能等の各ジャンルが、横断的に連携しあって、単独のジャンルに縛られない、新しい形の文化が創造されつつあります。美術館の中での演劇、及びパフォーマンス、現代美術家によるオペラや演劇の演出及び舞台美術、映像と現代音楽のコラボレーションなどがあげられますが、これからの時代に共通することは、高度な情報及び映像処理技術を駆使したソーシャルメディアが、どのジャンルにおいても重要となるということです。この分野では日本は最先端に位置していますが、例として、映像技術に関しては、現在のハイビジョンは2020年頃には4k、8kの時代になると予想されます。

今我々のなすべきことは、文化の各ジャンルに精通し、メディア横断的な感性を持ち、文化的アーキテクトとしての能力を持つ人間を2017年頃までに育成または発見することであると考えます。越境する文化は国際的にも越境します。日本的感性が海外の文化に影響を与えた例は数多く見られます。アメリカの建築学科の学生には、谷崎の陰影礼賛は必読書となっています。そして英国の演出家サイモン・マクバーニーによる谷崎の「春琴抄」の舞台化は、欧米と東京で高い評価を受けました。今回招請する文化人の一部にはこのような日本的感性を実現しつつある海外の才能も招待されるべきであると思います。越境する文化が、来るべき時代の文化的なテーマとなることは確実なのです。